

「メディアによるロシア語教育ーラジオ講座で学ぶロシア語」

村田 真一

1. ラジオ・ロシア語講座のあらまし

(1) 放送史

1931年にNHK英語講座スタート。ロシア語は1956年から。週二回30分ずつ。今の「月～木入門編」、「金・土応用編」各20分というスタイルは1967年から。1977年から両方も半年単位になり、年度前半の内容を次年度後半に再放送。現在は一日二回放送。

(2) 担当講師・ゲスト

講師は主に大学の専任教員だが、非常勤教員もいる。ゲストは日本在住のロシア人が中心。

(3) 学習内容・目標

入門編で初級文法を習得し、応用編で会話力や読解力を高めるのがねらい。大学あるいは公開講座の授業スタイル。当初、主として学生あるいはロシア語既習者が対象だった。

テキストは、入門編が、「短い例文」ないし「対話文」、「文法説明」、「練習問題」の3部構成。応用編は、「会話」か「文学作品・評論の抜粋」など。スキットを録音で聴き、ゲストの朗読に合わせてスキットや新出単語を発音練習する。講師による語彙・語法の説明を聴いた後、スキットを繰り返して発音し、練習問題を解く。

(4) テレビの講座との違い

テレビ・ロシア語会話は1973年放送開始。一般の視聴者に興味をもたせ、ロシア語学習者の裾野を広げるのがねらい。近年、ラジオとテレビの講座の番組内容や到達度の差異が著しくなった。なお、放送大学のコースはラジオ講座のスタイルに近い。

2. 現在のラジオ・ロシア語講座から学べる内容

(1) レベルに合わせた学習

入門編で基礎事項を反復。半年サイクルの効果。1年後に応用編へ移行することが目標。

(2) リスニングのトレーニング

語学学習において決定的な意味をもつリスニング能力が身につく。

(3) 活用のしかた

学習効果を上げるために、CD、テキスト、ミニ語彙集を活用できる。

(4) その他

リスナーからの書面による質問に対応している。

ロシアの文化やレアリアを紹介する機会が増えた。

テキストの巻末に読み物や書評、読者の声の欄、書籍や文化関連のインフォメーションなどが載り、テキストがロシアに関する情報誌の役割も果たしている。

3. ラジオ・ロシア語講座の課題と展望 — 担当講師の立場からの提言

(1) レベルの問題

リスナーにより、学習目的や到達度にかなり違いがある。初学者には入門編の進度が速い。リピータにとって入門編は物足りないが、応用編はやや難しい。入門と応用を効果的につなぐ中級講座がない。→曜日ごとのより細かいレベル分けや微調整が可能。

(2) 時間帯・時間配分の問題

時間帯の工夫が必要。放送時間もやや短い。→録音する。「一回 20 分」の枠内では、学習項目を取捨選択し、基礎をしっかり盛り込む必要がある。

(3) 講師とリスナーの双方向からの働きかけ

より活発にできないか。→リスナーを随時出演させたり、添削講座を設けたりする。

(4) リスナーの学習目的・目標の明確化

いかにして継続学習するか。→いつでも学習を始められるのは便利だが、いつでも中断できる。また、その他の言語と並行学習した場合、学習効果が薄れるケースもみられる。

(5) ロシア語の導入部の教授法

ロシア語学習は入り口が難しい。→担当講師は、他言語の講座も研究し、試行錯誤を重ねて、より効果的な教授法を練りたい。

(6) 教養か実用かという問題

語学学習は「実用第一主義」へ傾いている。→可能な限り、専門分野の異なる講師を採用する。基礎をしっかり身につけることができる講座にする。イントネーションや和文露訳を効果的に教える方法をより充実させる必要がある。充分とはいいがたいロシア人の生活文化の視点をスキットに盛り込む工夫も不可欠。